

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-7

客間の照明が一段と明るさを増していた。

ほろ酔い機嫌が言葉遊びに輪をかけるのは必定で、こうなったからには、もうケセラセラで行くしかないと観念した真紀が、腰を据えて飲み直そうと帯を緩くしたところで、香水の匂いを引き連れた大柄な女が、せかせかと客間へ入って来た。

「義姉です。こちらはお友達の真紀さん。大学の時の先輩です」

麻里子は一見もっともらしい嘘をついた。

「真紀と申します」

真紀はあわてて名のると、腰を浮かしかけた。

「そのままいてください。貞子です。素敵な方ね」

真紀を制した貞子は、ぞんざいな口のききようだが、それでも派手な顔立ちの大きな瞳に枯淡な趣を映していた。

「私の部屋に泊まってもらいます」

「羨ましいわ、そんなお友達がいて……。どちらからいらっしゃったの？」

「東京です。一晩お世話になります」

数分かけて、どうにか気持ちを鼓舞することができた真紀は、貞子を直視して答えた。

「どうぞ、ごゆっくり。私はこれで……。あら、いやだ！編み笠のスペアがあるのか聞きに来たのに、いくら探しても見当たらないの」

「私の使ってください。今夜は見物人～」

「え、それは駄目よ。あなたが踊らないなんて……」

「編み笠、後で持っていきます」

麻里子は真顔で義姉をあしらうと、真紀のグラスに酒を注いだ。

「そう、わかったわ。何か見繕って持ってこさせましょうか」

「みんな取り込み中だから、私がやります」

貞子は麻里子のつっけんどんな言い草に不満顔を見せながらも、「ゆっくりしてってくださいね」と真紀に向って薄笑いを浮かべて言うと、そそくさと居間を出て行った。

「匂うでしょう！」

外気を取り込むためにガラス戸を開けた麻里子は、真紀に同意を求めた。

「正直言って慌てました。まさかこんな形でお会いするなんて！」

「重なる時は重なるものよ。これでオールクリアと思えば、ラッキーでしょう」

「意地悪ね。ところで、踊るとか踊らないとかのお話し……。私のせいなら、困るわ」と真紀は上の空で言いつつ、どこか憎めない人柄を感じさせる貞子の残像を引きずっていた。